

新聞記者

写真は東京新聞記者・望月衣塑子さん著の角川新書新刊。読みたかった本であり、年の瀬に一気に読みすすんだ。

表紙カバー裏から一官房長官会見に彗星のごとく現れ、次々と質問を繰り出す著者。脚光を浴び、声援を受ける一方で、心ないバッシングや脅迫、圧力を一身に受けてきた。演劇に夢中だった幼少期、矜持ある先輩記者の教え、スクープの連発、そして母との突然の別れ……。歩みをひもときながら、劇的に変わった日々、そして記者としての思いを明かす。

強権的な安倍政治、とりわけ「もりかけ疑惑」を思い出しながら、本書をじっくり読んだ。文部科学省の前川喜平前事務次官、フリージャーナリストでレイプ被害にあった詩織さんへのロングインタビューが心に残った。

「前川さんや詩織さんがたった一人でも闘おうとし、社会的に抹殺されるかもしれないリスクと背中合わせで疑惑を告発している。2人の勇気をだまってみているだけでいいのか。遠くで応援しているだけでいいのか。私にできることは何なのか—考え続けているなかで、目の前に浮かんできたのは安倍首相であり、菅官房長官だった。」

官房長官会見の望月質問は、テレビなどで何回も見た。菅長官のふてぶてしい態度、粘り強い質問で一瞬変わる表情に注目した。「一般の方からの想像以上の反響は、裏返せば、メディアへの日ごろの不信の表れともいえる。『私たちが知りたいこと、だれも聞かないじゃない』と。権力者に対して記者が質問をぶつけることは当たり前のことで、本来であればもてはやされるようなことではないが、今や権力にモノを言えないところまで来てしまった。ジャーナリズムとはかっこいい言葉だが、その限界値が見える気がした。」

「事件取材で、最初から真実を聞けることなど、まずない。ぶつけた質問が否定されることを前提に、何度も何度も疑問を投げかける。駆け出しのときから、記者としての原点は変わらない。当初は場違いに思えた首相官邸でも、自分のスタイルを貫いた。」

首相や官房長官などの会見を見ていて、いつも違和感を覚えた。記者がなぜ、もっと積極的に質問しないのか、「想定問答」の繰り返しを腹立たしく思っていた。本書を読んで、会見の様子、記者らの姿勢がすこしは分かってきた。時の権力に立ち向かい、真実を追及するジャーナリズムの原点を忘れた記者がなんと多いことか。時の権力に擦り寄る記者クラブ、読売と産経に代表される安倍政権「応援団」には、怒りすら湧いてくる。

「続々重版!」のようだが、ぜひ多くの人に本書を読んでもらいたい。

(2018年1月3日)

